

## 第8章 西インドの雑穀農耕文化

西インドは、アフロアジアとインド亜大陸を繋ぐ地域である。第1章で記したようにインダス文明の影響下にあった地域である。栽培されている主な穀物はコムギやオオムギ、雑穀類はアフリカ起源のモロコシ、トウジンビエ、シコクビエである。

### 8.1. パンジャーブ州およびハリアナ州

#### 1) パンジャーブ州およびハリアナ州の自然と文化

気候は冬と夏のモンスーンによって、冬は爽やかな寒さ、夏は酷暑である。マスタードの収穫が終わると、コムギやオオムギの収穫になる。モンスーンが過ぎると、涼しくなり、イネ、トウモロコシ、雑穀、豆類が播種される。

パンジャーブ州とハリアナ州はインド社会の最も早期の証拠がある。考古学者たち 30 万年以上前に石英で作った道具を見つけている。銅や青銅で造った農具はおおよそ 25 世紀 BC 頃に村社会の存在を示している。

パンジャーブはかつてインダス川の北西に広がっており、5つの川が流れていたため、ギリシア人には Pentopotamia として知られていた。ペルシャ人は panj-ab (five-waters) と名付けた。1947年にパキスタンが分離する際に、パンジャーブの大部分がパキスタン領になった。パンジャーブ語は両国で話されているが、宗教はパキスタンがムスリム、インドがシクかヒンドゥである。1966年に Sikh 教運動により、パンジャーブ、ハリアナおよびヒマチャル・プラデシュ州に分割された。パンジャーブとハリアナの人々は共通性が高い (APA Publications 2004)。

パンジャーブ州における緑の革命の経済的打撃は、とくに経営規模の小さな農家層を直撃している。地下水位が低下し、より深層の地下水を汲み上げるためには多額の投資が必要であり、小規模経営には手が届かず、また中規模以上層による新しい管井戸投資に伴って、古い型の管井戸が枯れ、よって小規模農家は土地を借地に出すか、あるいは負債に苦しんでいる場合には土地を売却せざるを得なくなっている。中には、「名誉を守るための自殺」を図るケースも少なくないという。経済的な地盤沈下への有効な対抗手段の一つとして近年、海外移住や海外出稼ぎが急増している。パンジャーブ農村は土地なし世帯の比率が高く、その大部分がスケジュールド・カースト SC という特徴があるが、彼らが土地を集積していき、将来の中核的農業経営層になるという可能性は、ほぼゼロであると考えられよう (藤田幸一、柳澤悠・水島司編 2014)。

#### 2) フィールド調査

ハリアナ州のカナール Karnal にオオムギの研究所を訪ねたのは 1983 年 9 月 9 日に小西猛朗の供をしてのことであった。National Agricultural Institute; All India Coordinated Improvement Project, IARI Regional Station. Karnal, Haryana に Dr. Mahabal Ram (Project Coordinator) を訪ねた。トウジンビエは chapatii に、シコクビエは北部で作っている。Delhi bus terminal 9:30, Ranipat 11:00, Karnal 11:45. オオムギのセンター。気候がオオムギに適しており、16の試験場が全国にある。ここはオオムギのセンターで、昆虫、作物、生理部門がある。特に灌漑、salinity のことを中心に研究している。育種 breeding の目的は、①穂が下垂すると雨がたまらず、穂発芽しない。②短稈、③高タンパク。収量はコムギ<米<オオムギ。多量のものを作る chapatii はグルテン含量の多いものが必要。120~140 以上。クリーム色のものがよい。焼いたときに黒いものはだ

め。短稈は窒素肥料 N を多くして収量を上げる。高い窒素 N、灌漑 irrigation などの改善。トウモロコシ、トウジンビエ、モロコシも交雑により高収性の物を作ろうとしている。トウジンビエは品種改良が進められている。

## 8.2. ラジャスターン州

### 1) 自然と文化

ラージャスタン（ライジプートの土地の意）州はパキスタンと長い国境を接している。西部にはタール砂漠が広がっている。ラジャスターンでは、トウジンビエとモロコシを主に栽培している。主な言語はヒンディ語であるが、ラージャスターニー語も話されている。イスラーム勢力と戦ったラージプト族の本拠地であった。

州都ジャイプル Jaipur の旧市街は建造物の色は統一されており、ピンクシティと呼ばれている。アンベール城ゾウに乗って登った。風の宮殿はとても美しい。

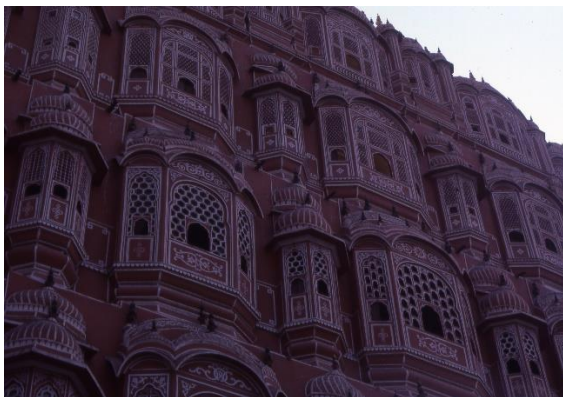


図 8.2. 風の宮殿（ジャイプル、ラジャスターン州）

### 2) フィールド調査 1987 年

11 月 1 日 5:30am に起きる。6:10 に 1F に降り、運転手の到着を待つ。デリーの朝は早く、薄明かりの中を活動が始まっている。朝は寒い、冬の寒さはどうであろうか。霧が出る。7399km、6:35. York Hotel を出る。デリーの朝は寒く、火をたいて暖を取っている。ショールか小毛布を身に纏っている人も多い。7401km、6:40. Gas を入れる。45 リットル。ブーゲンビリアやピンクのネットタイサクラも良く咲いている。ジョギングをしている人が稀にいる。NH8、空港を通り過ぎる。

Delhi-Bombay Road、7421km、7:05. Roadtax 20 Rs. Delhi の市境であろうか。子どもがマリーゴールドのレイを売っている。デリーの郊外は荒地だが、野菜や花の栽培がある。街路にユーカリが多い。NH8 は整備が良い。80km/hr、7424km、農地が多くなり、トウジンビエが少しから次第に多くなる。収穫期である。ラクダ 1 頭荷役、ロバ 10 頭。

7440km、7:31am. 農村地帯に入るが土地は荒れている。7454km、7:45am. モロコシ少し。ラクダによる耕起。土壌表面は著しく乾燥している。火山灰土のように赤く、細かい土。コムギでも播くのであろうか。Haryana 州に入るとラクダが多い。野菜畑がとても多い。ラクダも力が強いようだ。ウシではなく、ラクダが荷車を引く。

7469km、8:00am、Jaipur まで 192km。水牛もいるが、ラクダのほうが 2 倍も大きく、数多く見る。干草、石などいろいろ運んでいる。2 x 2.5 m<sup>2</sup>ほどのプロットに少しずつ灌水している。もう暑くもないのに、乾燥しているのは、雨が降らないからだろう。畑の境には

常緑樹が植えられている。

7503km、8:33. トラックが転倒している。畑作地帯、少しずつ水遣り、何で運んでいるのだろうか。トラックのドライブインは 所々にある。

7508km、Jaipur まで 154km。ここで Rajasthan に入る。レンガ工場 2 カ所、所々にチェックポストがあり、tax を払う。パンパスグラスのような植物が水路沿いに多い。右に岩山が見えてくる。広大な地域が耕作されており、おそらくコムギがすでに播かれているのであろう。7524km、8:57. 井戸の近くは水が施されていて、苗床、野菜が作られているようだ。植木はアカシヤの 1 種か? 7526km、9:00-9:40. Peacock restaurant で朝食、土産も売っている。ヤギ、ヒツジ 50 頭。小さい交差点に出る。バナナ、リンゴ、ダイコンなどを売っている。長い毛のブタがいた。車の修理屋、レストラン。トウジンビエを所々に見る。イモノキがあるので、地下水位は浅いようだ。左の遠くが煙って見えるのはなぜか? サリーの人はいない。Panjabi かスカート。

7552km、10:05am. ミラーワークのスカートやショールをまとっている。朱赤色。馬に乗っている男が 2 名。ウシも耕作に使われているが、むしろ少ない。ラクダがよく活躍している。人家の近くには畑があり、水を与えて、野菜やハーブを作っている。灌水畑を見たが、ヒユらしき植物が多く発芽していて、イネ科は出ていない。何が播かれているのか? 灌漑をどうしているのか? 井戸のないところでもかなり水を与えている。トウジンビエか、風選をしている。ネナシカズラがきつくまとわりついていて。Semi-arid の乾いた感じは心地よい。7577km、10:45. Jaipur まで 87km。水のない川ワジを渡る。

良く耕作されている。右の岩山には特に高木はない。種子は条播。ずっと同じ景色。無数のトラックがいる。トウジンビエの殻が山になっている。上向きが多いが、下向きも少しはある。サリーの端を肩にはかけない。ショールは黄色、シャツはオレンジかピンク、スカートは青と赤。

7613km、11:22am. ラクダばかりだ。やはり水がないのだろう。小さな水無し川をわたる。雨季には流れるのだろうか? 砂地で浅い。ワジが多い。左右に低い岩山。乾いた土に、原色や白が目にしみる。鮮やかに。低い峠を越えたら、少し緑が多くなった気がする。

7634km。右に小さな城が岩山の上にある。イモノキも多い。畑の畦に草がある。土壌は砂のようだ。岩石の家が岩山のすそにあり、その区別がつかない。屋根は草で葺いてある。男は布を頭にくりくりに巻いている。岩山にはすでに落葉した木が多く、まるで初春のようだ。サル 3 匹いた。フェニックスヤシが少し出てくる。水気が見たよりも多いのかもしれない。野菜畑が多くなる。Jaipur が近いからであろう。7654km、12:00、Jaipur まで 12km。右折。運転手はここでは何も買うなと助言する。

7656km、12:03 到着。13:10 城の上にゾウののって行く。乾いた土地の巨大な城。恐らく当初は石組みだけであったのであろう。セメントのはげ間から石組みが見える。左手に湖と宮殿。使役ゾウは数 10 頭はいそう。市内に向かう。緑が多くなる。水遣りはモーターポンプでやるようだ。Citypalace の museum を見る。

7665km、13:30-14:25. 昼食、Kwality Restaurant, City Palace。サリーの人もいるが少ない。ヒシ shitapa の実を売っている。3-4cm くらい大きい。緑から濃い紫色。

7672km、15:25. Rajasthan の女性集団の行動は面白そうだ。日曜日なので、半分くらいの店はしまっている。途中、emporium によって、そのまま Delhi に向かう。お茶は朝食と同じところとる。20:30、York Hotel に戻る。途中でお茶にした。21:00 Ginza で夕食。20 人ほどの集団行動を取っているところは、昨日の映画のジプシー(ロマ族)とそっくりで、

服装も似ている。Rajasthan や Gujarat あたりから西へ流れて、混血した可能性もあるのだろうか。アーリア人は西から進入したのだから、小集団が西にさまよっても不思議はない。さまよいの始まりは戦争だろう。ユダヤ人にしても、中国人、今日ではベトナム人、カンボジア人などもそうではないか。故郷を捨てても自由を選んだわけだ。チベット人が Jaipur でも服屋をやっていた。彼らも出てきたわけだ。自分自身だってそうするだろう。家族、自由が第一、戦争に不本意に巻き込まれることはない。第 3 国に逃げても良いわけだ。

Pink city とは Jaipur の風宮殿が pink の砂岩でできているので、これに合わせて商店もピンクのペイントで塗ってある。面白い町だ。外国人も多い。ゾウに乗ったのは楽しかった。車の 3 倍の高さはある。ラクダも背が高い、力もある。しかもスイギュウと違って、不敵な顔は大いに気に入った。猫に似て野生を顔に残しているのだろう。城主は maharaja と比べて、質素で悪くない。天文台の日時計は割りと正確であった。星座ごとの天球儀、があったが、見方は不明。

### 8.3. グジャラート州

アラビア海に突き出たサウラシュートラ半島とその付け根に位置するグジャラート州は、南から西を海に接し、北はカッチ湾をまたいで、カッチ湿地がある。冬はほとんど晴れて乾燥、6 月のモンスーンでは大量の降雨があり、洪水が起こる。

乾燥地と湿地に挟まれ、平原ではワタ栽培により、綿布の輸出が行われてきた。綿花は主に東南アジアに運ばれ、その輸出の見返りとして、東南アジア経由で中国の絹や香料が入ってきた。これらはさらに、グジャラートの商人を介して西方に運ばれて、金銀となってグジャラートに戻ってきた。タバコ、ラッカセイ、ナツメヤシ、サトウキビ、イネなどが栽培されている。雑穀では、モロコシ、トウジンビエ、シコクビエが栽培されている。

民族はグジャラート族が多いが、言語で見ると著しく多様であり、グジャラート語のほかに、ロマ語、カッチ語、シンド語、ビリー語、ガミット語、ウルドゥー語、マールワリー語、マラーティー語、パンジャーブ語、タミル語、テルグ語、ベンガル語、カンナダ語、オリヤー語、マラーヤラム語などであり、産業が盛んであり、貿易の仲介地点であることをよく示している。

グジャラートの考古学遺跡は、Lothal および Rozadi で見つかっており、ラッパーやモヘンジョダロの栄えた時代 3500 年前にまでさかのぼることができる。グジャラートは 5 世紀以降、北方騎馬民族フン族の侵入をうけ、11 世紀にはイスラーム勢力の支配下に置かれた。1573 年にはムガル帝国に併合された。

ヒンドゥ教徒が大半で、イスラーム教徒は 1 割以下だが、モスクは多い。南西部のカーティアワール半島の東にあるパリタナはジャイナ教の聖地で、州全体が禁酒になっている。宗教的には拝火教、仏教、キリスト教なども混在する。インド独立の父と称される M.K. ガンジーの出身地である（地球の歩き方編集室 2001、AP Publications 2004、Wikipedia2024.9.18）。

グジャラート州では、バティダールなどの主要農業カーストは、低位カースト（とりわけ SC）には農地を小作に出すことすら、それが「恥」であるとの観念が強く、したがってパンジャーブの州のジャット・カースト同様、彼らが農地を手放し、農業から退出するという事態は少なくとも当面、考えにくい。伝統的な農業の生産組織は維持されたまま、次第に雇用労働依存から家族農業依存型へと転換していくと想定されるのではなかろうか

(藤田幸一、柳澤悠・水島司編 2014)。

残念ながら全く調査に訪れることはなかった。アフロアジアとインド亜大陸を中継する位置にあるので、興味深い。グジャラートでは、アフリカ起源雑穀のモロコシ、トウジンビエ、シコクビエを栽培している。とても幅広い変異が見られる、穂の長いトウジンビエは興味深い。

#### 8.4. 栽培と伝播のまとめ

主な栽培穀物は、半乾燥地ではコムギやオオムギ、湿地ではイネも栽培されている。雑穀はトウジンビエとモロコシが多く、グジャラート州ではシコクビエも栽培されている。これらの点からは、インダス文明の影響下で地中海農耕文化、アフロアジア経由のサバンナ農耕文化の伝統が継承されていると推察できる。グジャラート州のシコクビエ栽培は、その伝播経路が沿海であることを示唆している。さらに詳細は第 13 章で統合的に考察する。

#### 引用文献

APA Publications GmbH & Co. 2004, Insight Guide India, Verlag KG, Singapore.

地球の歩き方編集室 2001、地球の歩き方③インド編 2001～2002 年版、ダイヤモンド・ビッグ社 2001、東京。

藤田幸一、柳澤悠・水島司編 2014、激動のインド第 4 巻農業と農村、日本経済評論社。